

# 施設・設備の利用からみた 駿河台大学学生のキャンパス生活

渡 辺 裕 子

## I はじめに

筆者は1995年から2005年までの10年間に隔年で計6回にわたり、本学学生を対象に「駿大生の生活と文化に関する調査（以下、「駿大生調査」とする）」を実施してきた。この10年間で、学生を取り巻く環境には次のような変化が生じた。第1に経済的状况では、バブル経済崩壊後の長期低迷が依然として続いた。この影響は若年層に最も大きく現われ<sup>1)</sup>、学校卒業後に就職できない者が増加し、フリーターやニートなどの存在が社会問題として注目されるようになった。第2に文化的状況としては、通信機器が発達しインターネットや携帯電話が急速に普及した。それにより、若者のコミュニケーション手段や行動様式が変化した<sup>2)</sup>。第3に社会的状況としては、一方で阪神・淡路大震災を契機として、他方で文部科学省の人格形成における体験学習の重視策から、地域貢献活動やボランティアなどに対する関心が高まった<sup>3)</sup>。そこで第1回～第5回調査では、このような環境変化の中から各回のテーマを取り上げ、本学学生の実態分析や問題の指摘などを中心に報告を行ってきた<sup>4)</sup>。

さらに最近の学生を取り巻く環境としては、高校卒業人口が団塊ジュニア世代をピークとして1992年以降、減少し続けている。そのため、大学入学定員が高校卒業人口を上回り、大学進学希望者の全員入学が可能になるという事態が、目前に迫っている。また、経済的不況による高校生の就職難とも相俟って進学志向が増加し、1980年代以来、上げ止まっていた大学進学率が再び上昇に転じている。これらの要因により大学の大衆化が一層進行したというのが、近年の環境変化のうち最もインパクトの強い現象であろう<sup>5)</sup>。

ところで2005年に実施した第6回調査は、本学学生課による「大学キャンパスにおける施設・設備の利用実態と利用意向に関する調査」として企画・実施された<sup>6)</sup>。このような経緯で今回の調査では、本学学生の特徴を大学キャンパスにおける施設・設備の利用状況に注目して捉えることとなった。そして結論を先取りすれば、

校内施設・設備の利用行動には学生のライフスタイルに対応した違いが生じており、キャンパス内での棲み分け傾向が認められたのである。そこで本稿では、ライフスタイル類型別の行動の特徴と問題を明らかにする。また、大学のユニバーサル化という時代の局面を考慮しつつ、ライフスタイル別に問題への処方箋を検討することにした。

## Ⅱ 学生の類型

本稿では学生の意識や行動における特徴・問題を捉えるために、学生の類型を設定するという手法をとっている。そこで始めに、学生の特質ないし特徴的傾向を把握するための方法論に関する考察を行い、6回に及ぶ「駿大生調査」で用いられてきたライフスタイル類型を示すことにしたい。

### 1. 学生像を把握する方法

学生像ないし青年・若者像を把握するための方法には、おおよそ3つのアプローチがあるといえよう。すなわち第1に、「共通性・普遍性」を捉えようとするアプローチである。例えば、発達心理学などでは個人差は発達の早い・遅いといった違いとして捉えられ、伝統的に発達における普遍性を見出すことを課題としてきた<sup>7)</sup>。「発達課題」などの研究で知られるエリクソンは、そのようなアプローチをとる研究者の一人である。エリクソンは各生活周期段階には発達課題が存在するとし、青年期の課題としてはアイデンティティの確立をあげている。そして、アイデンティティの確立過程でとられる、青年の一見移り気で多様な行動にも、「忠誠(fidelity)」が見てとれると述べている。例えば、「科学的・技術的方法の正確さ、従属の誠実さ、歴史や小説の真実性、試合規則の公正性、芸術作品の真正性<sup>8)</sup>」など、何ものかに対する忠誠こそが、基本的に青年期を特徴づける固有の力と考えた。つまり、青年はあれこれ試みる変わり身の早さを持つ反面、変化の中になお変わらぬものを渴望する姿勢が見出されるのである。

しかしながら、イデオロギーを喪失したと言われる今日の社会では、青年における共通で普遍的な信念は見出し難くなった。このような時代の変化と連動して、発達心理学などで用いられてきた「青年」概念も使われることが少なくなり、他方で、時代の状況や風俗などを反映するニュアンスが強い「若者」概念が、より多く用いられるようになった<sup>9)</sup>。これらの若者研究で取られているのが、「共通性・普遍性」

を捉える第1のアプローチとは反対の、「多様性」を捉える第2のアプローチである。この方法によれば、若者のいくつかの類型を示すことで、その集団・社会の状況が描写される。さらに第3に、「典型性」を捉えるアプローチがある。

ところで、典型像は必ずしも統計的な最頻値や平均値だけによっては捉えられない<sup>10)</sup>。例えば、数的には多数派といえない場合にも、その時代に先端的な若者や早期追随者などによって、典型性がより象徴的に描写されることがある。このような場合には、面接調査などの事例的手法によって学生像を描くことがより適しているといえる。一方、本稿のような統計的な大量観察データが相応しいのは、第2の「多様性」を捉えるアプローチであろう。そのため「駿大生調査」では、学生を類型化するという方法を一貫して採用してきた。

## 2. 学生の類型化

### (1) 類型化の方法

学生・生徒ないし、青年・若者を類型化するには、いくつかの分類の基準がある。大別すると、意識・態度・行動のレベルのうち、①意識や、行動の準備状態である態度に注目して分類したものと、②行動によって分類したものがある。例えば、東京都青少年・治安対策本部が1976年～1997年に3年おきに実施してきた「東京都青少年基本調査（大都市青少年の生活・価値観に関する調査）」では、コツコツ青年（堅実型）、ふわふわ青年（安穩型）、イライラ青年（不満型）、ゆうゆう青年（自律型）、の4類型が用いられてきた。これらは意識・態度レベルの違いによる分類といえる<sup>11)</sup>。一方、教育社会学の領域で生徒文化の類型化が試みられてきたが、学校生活で何に価値をおいて行動するかにより「勉学型」「娯楽・交友型」「社会活動型」などおおよそ3つに分け、これに脱学校の「逸脱・非行型」を加えた類型が多い<sup>12)</sup>。これらは、行動の違いによる分類となっている。

さらに、「意識—態度—行動」を関連づける行為システムとしての個人に注目した分類方法があるが、宮台慎司は5つの「人格類型」を提唱した<sup>13)</sup>。それらは、「ミーハー自信家」「頭のいいニヒリスト」「バンカラ風さわやか人間」「ネクラのラガード」「友人よりかかき人間」と命名されている。これは社会学における行為理論にもとづき、行為をするにあたって取られる前提や帰結をどう解釈するかに関わる類型である。例えば、行為の期待水準を高めに設定し、水準に達しない場合にもそれを実現しようとするシステム（「バンカラ風さわやか人間」）、行為の期待水準を低めに設定し、行為の帰結に期待はずれが生じないようにするシステム（「頭

のいいニヒリスト」などに区別される。

## (2) 本研究における類型

さて本研究では、学生類型を「行動 (behavior)」として表出される部分の特徴から把握している。社会学の学問的伝統において重視される「行為 (action)」の意味を明らかにするためには、「意識—態度—行動」の関連を捉える必要がある。しかし、駿大生調査では各回で異なるテーマが設定され、質問項目が異なるものとなった結果、時系列的分析に利用可能な共通の質問項目は少数に限られてしまっている。このような調査設計上の制約の中で選択されたのが、学生生活の主要な領域で示される行動に関する変数となった。

高校生を対象とした従来の生徒文化研究では、学校生活で重要な領域として勉強・交友関係・課外活動を取り上げ、これらと生徒がどのような関わりを持つかによって類型化をしている。しかし、高校生と大学生の生活には異なる点がある。すなわち第1に、大学においては固定的学級集団が存在しないため、大学生では交友関係が学校での適応・不適応を左右するウェイトが相対的に低い。第2に、大学生の生活は高校生のような、比較的、閉じた学校空間で展開されているわけではなく、アルバイトなどを通して社会が広がっている。そこで本研究では、学業、課外活動、そしてアルバイトの3つの生活領域における行動から、類型を構成している。

具体的には、第1に、1日あたりの家庭での勉強時間によって、「学業」の状況を捉える。第2に、週あたりの部・サークルの活動日数によって「課外活動」の状況を捉える。第3に、週あたりのアルバイト時間数によって「アルバイト」の状況を捉える。そして、学生生活の3つの領域のうちどれにウェイトを置いているかにより、まずは「学業型」「部活動型」「アルバイト型」のライフスタイルの3類型を設定した。3つの活動のいずれも突出していないその他の学生については、負担の軽いサークル活動に参加している者を「中庸型」、サークル活動には参加しておらず他に明瞭な特徴が捉えにくい者を「消極型」とした。これら5類型の具体的な操作的定義や特徴などについては、次章で述べる。

### Ⅲ 調査の目的と方法

#### 1. 調査の概要

##### (1) 分析枠組

冒頭に述べたように第6回調査は、大学キャンパスにおける施設・設備の改善などを目的として企画された経緯から、実践的・実用的な調査としての性格が強い。そのため、図1の分析枠組に示すように、スクールバスや学生食堂、授業の空き時間の利用施設など、「A. 施設・設備の利用実態」に関する質問、及び「B. 施設・設備の利用意向」に関する質問が大きなウェイトを占めている。しかし、本稿は施設・設備の改善を検討することが直接的な目的ではないため、「B. 施設・設備の利用意向」に関する分析は行わない。

一方、「A. 施設・設備の利用実態」は、学生のキャンパス内での生活行動を捉えるための変数群として位置づけられる。すなわち、学生のキャンパス内での行動を、主として「D. 学生のライフスタイル」と関連づけて分析する。また必要に応じて、学年や自宅・自宅外通学の別などの「C. 基本的属性」の影響について分析を行うことにする。

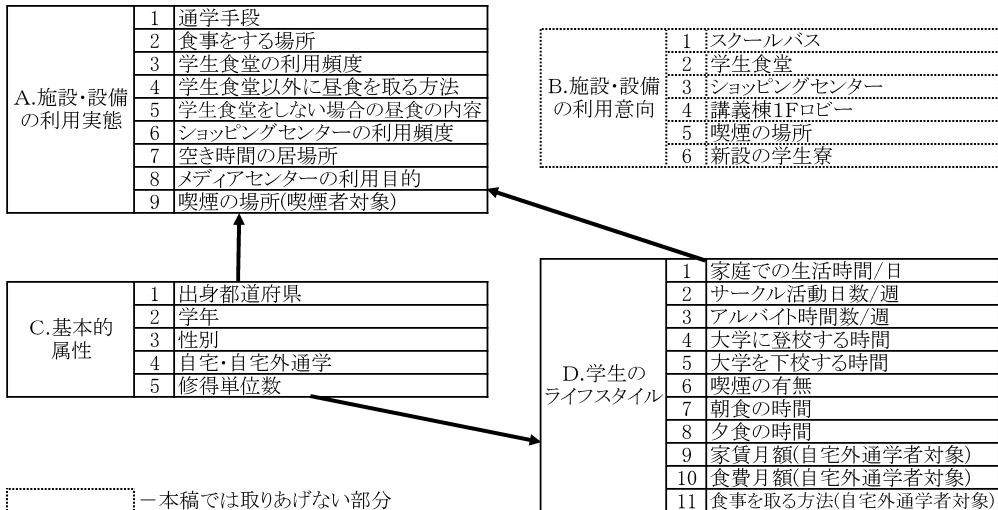


図1 本調査の分析枠組と質問項目

**(2) 対象**

当初は本学2～3年生必修の演習科目受講者を対象として計画されたが、一部、1年生・4年生の授業においても実施された。そのため本調査は、1～4年生計1,875名から回答されているものの、1年生が147名、2年生が737名、3年生が707名、4年生以上が263名と、2～3年生が多い構成となっている。学年別・性別の調査対象者の人数内訳については、表1に示す通りである。

表1 調査対象者の人数内訳

	1年生	2年生	3年生	4年生	過年度生	計
男性	105	535	518	187	5	1,350
女性	42	202	189	70	1	504
計	147	737	707	257	6	1,854

学年・性別不明=21

**(3) 方法**

演習の授業時間を利用した、集合調査法を採用している。各学年必修の演習科目は講義科目に比べて出席率が高い。そのため、一部の長期欠席者を除けば、本学学生の母集団からほとんど歪みのない標本が得られたと考えられる。調査の実施期間は、2005年7月4日～15日である。

**2. 学生のライフスタイル類型**

ここで、本調査の分析で用いるライフスタイル類型の特徴や、これと基本的属性との関連などについて示すことにしたい。

**(1) 各類型の特徴**

「駿大生調査」で用いられてきた5類型の操作的定義は次の通りである。すなわち、「学業型」は、部・サークルの活動日数やアルバイト時間数の多少に関わらず、1日1時間以上、家庭で勉強する学生としている。この基準を満たす者は今回の調査では全学生中の13%であった。次に「部活動型」は、「学業型」を除く者で、アルバイト時間数の多少に関わらず、週3日以上、部やサークルの活動をしている学生である。活動の内容や所属している団体数は区別していないが、ほとんどが体育公認団体<sup>14)</sup>に所属している者で、全学生中の14%であった。さらに「アルバイト型」

表2 ライフスタイル類型別の勉強、サークル活動、アルバイトの状況

		学業型	部活動型	アルバイト型	中庸型	消極型	全体
家庭での勉強時間/日	0分	—	44.8	43.8	43.8	35.2	36.4
	30分未満	—	30.9	34.3	32.0	36.9	29.8
	30分～1時間未満	—	24.3	21.9	24.2	27.9	21.3
	1時間以上	100.0	—	—	—	—	12.5
	計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
サークル活動 日数/週	なし	55.0	—	62.2	—	100.0	51.9
	1～2日	30.6	—	37.8	100.0	—	32.2
	3日以上	14.4	100.0	—	—	—	15.9
	計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
アルバイト 時間数/週	なし	37.5	42.8	—	46.1	50.7	30.8
	16時間未満	34.1	33.6	—	53.9	49.3	30.0
	16時間以上	28.4	23.6	100.0	—	—	39.2
	計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

は、「学業型」「部活動型」を除き、週に16時間以上アルバイトをしている者である。全学生中の32%であり、最も多い類型となっていた。「中庸型」は全学生中で16%、「消極型」は25%であった。

表2では、各類型の行動の特徴を示している。家庭での1日あたりの勉強時間は、「学業型」は定義により全員が1時間以上である。他の4類型では、「消極型」がやや勉強時間が長い。しかし、「部活動型」「アルバイト型」「中庸型」はあまり勉強しておらず、「0分」が多い。これら3つの類型は、授業への出席では後で示すように差がみられるようであるが、少なくとも家庭での勉強時間では差はない。

週あたりのサークル活動日数は、定義により「部活動型」は全員が3日以上、「中庸型」は全員が1～2日、「消極型」は0日である。「学業型」をみると、サークル活動が3日以上いわゆる文武両道型も一部に存在している。

週あたりのアルバイト時間数は、定義により「アルバイト型」では全員が16時間以上、「中庸型」「消極型」では16時間未満である。「部活動型」は「学業型」に比べて、部活動での練習時間が長い。そのため時間的拘束がより大きいと考えられるが、2つの類型にはアルバイト時間数に顕著な差があるわけではない。

表3 ライフスタイル類型の推移

	1995 N = 267	1997 N = 364	1999 N = 220	2001 N = 468	2003 N = 459	2005 N = 1837
学業型	7.9	12.9	11.4	7.9	12.2	12.5
部活動型	10.5	16.2	12.3	10.3	10.7	14.1
アルバイト型	27.0	29.1	24.1	25.9	25.3	32.3
中庸型	25.8	14.6	23.6	17.7	21.4	16.2
消極型	28.8	27.2	28.6	38.2	30.4	24.9
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

### (2) ライフスタイル類型の推移

本調査では第1回～第6回で一貫してライフスタイル類型を捉えてきたが、表3に1995～2005年の10年間におけるライフスタイル類型の構成比(%)の推移を示した。これによると、統計的に有意味といえるような変化は捉えられない。今回の第6回調査の結果も、ほとんどこれまでの変動の範囲内にある。家庭での勉強時間の短さ、サークル活動の低調さ、アルバイト時間数が多い者と全くしていない者の二極分化などの傾向や、「アルバイト型」と「消極型」が本学における平均的な学生像である点などに変化は生じていない<sup>15)</sup>。

ただし、詳細部分に注目すれば、アルバイト時間がやや増加傾向にある。近年、大学では、学力試験による一般入試から推薦入試での入学者が増加している。このような社会的背景のもとで受験勉強から解放された高等学校時点で、すでにアルバイトをしている者が増えている可能性がある。その結果、全体に占める「アルバイト型」学生の割合が、過去最高に上ったと考えられる。

### (3) ライフスタイルの学年による変化

ライフスタイル類型には学年による違いがみられる。図2によれば、入学直後の1年生では「中庸型」が最も多いが、2年生以上では「アルバイト型」と「消極型」が本学の平均的學生像となる。入学当初は大学生活におけるサークル活動への期待感が強く、何らかのサークルに所属することで学校に適應していこうとする姿勢がみられる。しかし、2年生になるとサークル離れが起こり、それらの学生の多くは「アルバイト型」に、また一部の学生は「消極型」へと転化する。この傾向は3年生ではさらに進むが、この時点までに定着したライフスタイルは、基本的に4年生の段階では大きく変化しないことがみてとれる。



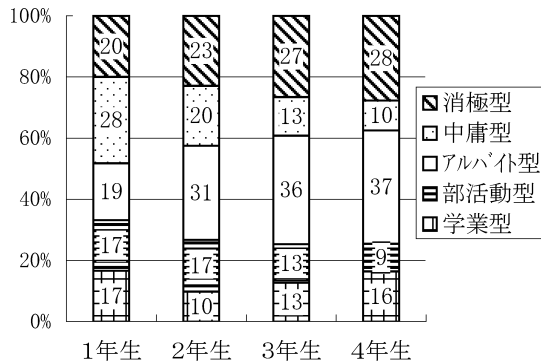


図2 ライフスタイルの5類型—学年差—

#### IV 施設・設備の利用からみるライフスタイル別キャンパス生活

##### 1. キャンパス内の利用空間

キャンパスでの生活は、授業、授業時間外での活動、昼食などの休憩に分けられる。このうち授業への参加は教室が指定されており、学生が選択可能な利用空間はない。そこで、昼食時の大学食堂の利用状況や、授業時間以外の居場所・過ごし方について示す。

##### (1) 大学食堂の利用

本学は郊外に立地しており、周辺には飲食店などもほとんどない。そのため、学生が食事をする場合には、1) 大学食堂を利用する、2) 大学の売店や通学途上で昼食を購入する、3) 弁当を持参する、などの方法が取られている。食堂はキャンパス内に2ヶ所あるが、1ヶ所は講義棟から遠い体育公認団体や体育部会・文化部会などの部室のあるクラブハウス棟にあるため、利用が一部の学生に限られている。そこで図3では、スクールバスの発着場に面した、大学会館内の食堂の利用頻度を示した。それによると全体では、「ほとんど毎日」利用する者は35%であるが、他方で「週1回程度」または「ほとんど利用しない」者も40%いる。

ライフスタイル類型別にみると違いが大きい。「ほとんど毎日」は「中庸型」では48%と半数近くを占め、「部活動型」も42%と多く、部活動やサークルに参加している者が大学食堂を利用することが多い。しかし、「学業型」「アルバイト型」「消極型」では3割程度にとどまっている。逆に「週1回程度」または「ほとんど利用しない」など、大学食堂以外の場所で昼食を取っている者は、「アルバイト型」で

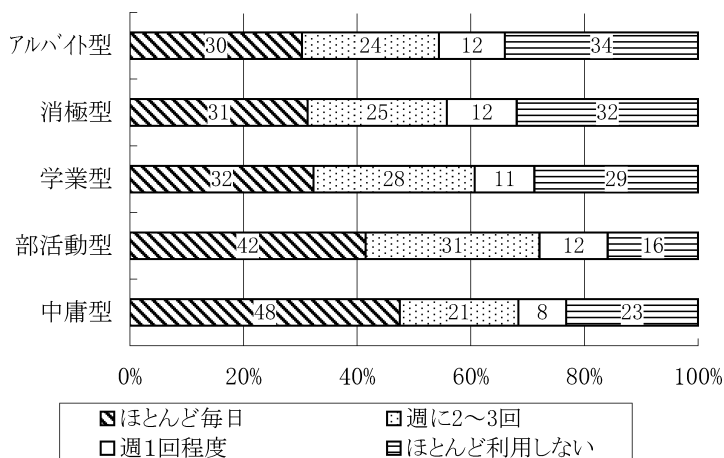


図3 大学食堂の利用頻度—ライフスタイル類型別—

は46%、「消極型」では44%と多かった。

(2) 授業時間以外の居場所

授業の空き時間の居場所について、「講義棟」「講義棟周辺」「メディアセンター」「クラブハウス棟または運動施設」「その他」の中で、最もよく居る場所を2ヶ所まで回答を求めた。また選択肢には、帰宅するなど「空き時間は作らない」も含めている。本学で全体として最も空き時間に居ることが多いのは「メディアセンター」であり、69%の学生が選択していることが特徴的である。「空き時間は作らない」は15%であった。

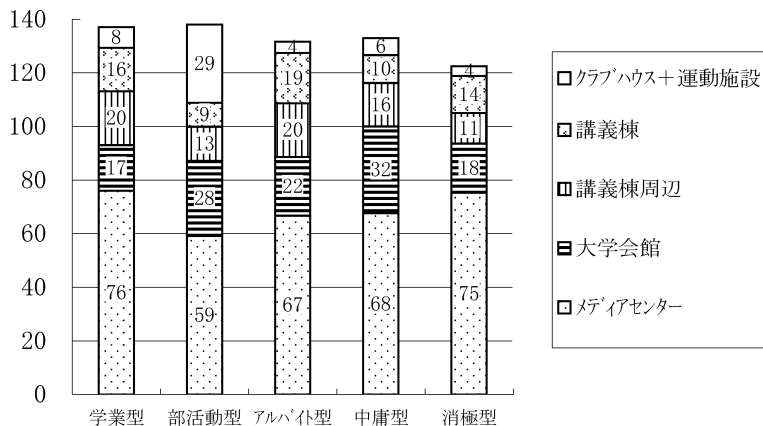


図4 空き時間の居場所—ライフスタイル類型別— (2つまで選択)

図4よりライフスタイル別の違いに注目すると、「部活動型」では「クラブハウス棟または運動施設」や「学生会館」に居ることが、他の類型よりも多い。また、「中庸型」は5つの類型の中で「学生会館」の利用が32%と最も多く、「学業型」の17%や「消極型」の18%と比べて大きな隔りがある。「学生会館」はサークルなどのグループで利用する場合の交流の場として活用されており、それ以外の学生にとっては必ずしも居心地のよい場ではないことが示唆されている。「学業型」や「アルバイト型」では、相対的に「講義棟」の空き教室や「講義棟周辺」などに居ることが多い。しかし、「消極型」はここにも居場所を見出すことができず、図には示されていないが、「空き時間は作らない」が20%と5類型中で最も多い。「消極型」の学生が、「メディアセンター」以外にキャンパス内で落ち着ける場所は少ない。

以上のように、本学キャンパス内ではかなり行動空間における棲み分け現象がみられる。

### (3) メディアセンターの利用目的

そこで次に、キャンパス内で最も利用されているメディアセンターで学生はどのように過ごしているのかを、図5に示した。本学のメディアセンターは通常の「図書館」「視聴覚センター」「情報処理センター」の機能を統合した施設である。したがって、回答選択肢は「図書」「視聴覚」「パソコン」の施設利用に分け、さらに「勉強」と「休息」を追加した。

利用の目的として多いものを2つまで選択してもらったところ、全体では「パソコン」が69%と最も多く、「視聴覚」が43%と次いで多かった。「パソコン」は日常

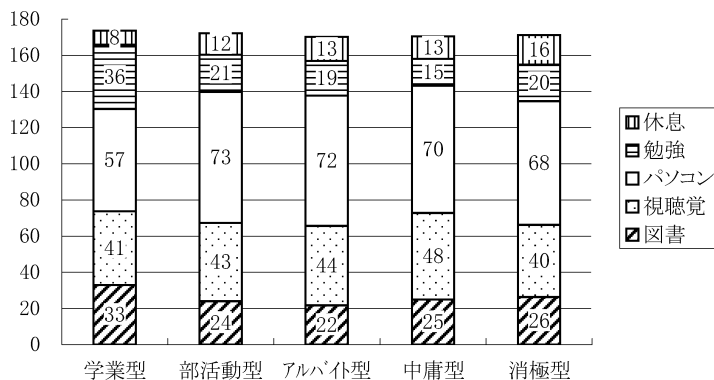


図5 メディアセンターの利用目的—ライフスタイル類型別—(2つまで選択)

的に課題レポートなどの作成に利用されており、「視聴覚」はAVライブラリーのDVDやビデオソフトなどがよく視聴されている。「中庸型」ではとくに「視聴覚」が48%と他の類型と比べて多く、仲間と連れだって話題の映画などを視聴しているようである。

「図書」や「勉強」などの選択は全体として少ないが、ライフスタイル類型別では予想通りに「学業型」で多くなっていた。また「休息」をしに来るのは「学業型」では8%であるが、「消極型」では16%と2倍に上っており、居場所として利用されていることも注目される。

## 2. キャンパスの滞在時間

次に、キャンパスがどのような時間帯に利用されているかを示すことにしたい。本調査では月曜日～土曜日までの曜日別に、登校時刻と下校時刻を質問している。全体の傾向をみると、授業科目の少ない木曜日・土曜日には利用者が少ないが、ここでは利用者が最も多く、かつキャンパス内での滞在時間が最も長い火曜日について示した。図6の時間帯別のキャンパス滞在率をみると、午前は授業開始時間に合わせるように「9時台」「10時台」に利用者が急激に増加する。逆に午後の「16時台」には急激に減少するものの、それ以降は徐々に減少していく。

ライフスタイル類型別にみると、「アルバイト型」と「消極型」はキャンパス滞在率が低い。とくに「アルバイト型」は夕方以降に働いている者が多いため、学校に早く登校する「学業型」「中庸型」と比べて、午前9時～10時台の滞在率が10%

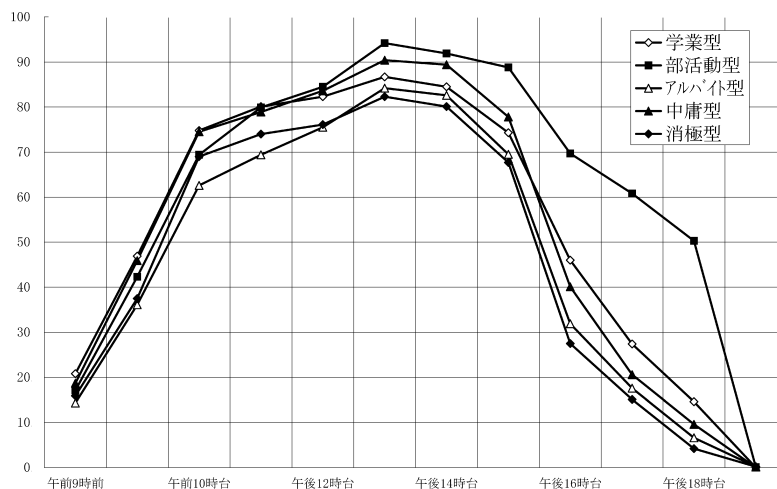


図6 キャンパス滞在率—ライフスタイル類型別—

程度以上低くなっている。また、「学業型」と「中庸型」を比較すると、「中庸型」では昼食をサークルの仲間などと一緒に食べ、大学会館を中心に社交が展開されるためか、午後13時～14時台に滞在率が高い。これに対して「学業型」は、授業終了後の午後16時台以降にもまだ比較的多くが大学に残っている。これは、「学業型」ではメディアセンターなどが、「図書」や「勉強」を目的に利用されているためと考えられる。5つの類型中、最も滞在パターンにズレがあるのが「部活動型」である。彼らは午後になってから登校する者も多い。また、他の類型では1割程度しか残っていない午後18時台のキャンパスに、まだ半数以上が滞在している。

### 3. 各類型の大学への適応状況

#### (1) 適応の2つの次元

ここで先の表2、及び図2～6に示した行動や行動空間から、各ライフスタイル類型の大学への適応状況について検討してみることにしたい。大学への適応を捉える場合には、大きく分けると2つの次元を設定することができるであろう。すなわち1つは、学業達成を目的とする「業績主義規範の取得—否定」の次元である。もう1つは、大学キャンパスという場で展開される「キャンパス生活への統合—離脱」の次元である。したがって、業績主義規範を取得しかつキャンパス生活に統合されている場合には、大学への適応が良好といえる。しかし、業績主義規範を取得しているがキャンパスからは離脱している場合や、逆に、キャンパス生活には統合されているが業績主義規範を否定している場合は、部分的にのみ適応しているといえよう。

#### (2) 業績主義規範の取得—否定

本調査では、意識や態度を直接的に捉えるための質問項目はほとんど含まれていない。しかしながら、学業を奨励する「業績主義規範の取得—否定」の次元は、「家庭での勉強時間の長さ（表2）」「早い時間帯における大学への登校（図6）」「勉強目的でのメディアセンターの利用（図5）」などの行動から、捉えることができる。

そして、第1に「家庭での勉強時間の長さ」は、定義により「学業型」が最も長い、「消極型」がこれに次いでいた。しかし、「部活動型」「アルバイト型」「中庸型」には差はみられなかった。第2に「早い時間帯における大学への登校」は、「学業型」「中庸型」では多く、「アルバイト型」「部活動型」では少なかった。したがって、「学業型」と「中庸型」では授業の出席が良好であると考えられる。第3に「勉

強目的でのメディアセンターの利用」は、「学業型」で際だって高かった。

これらの結果から、業績主義規範の取得度は5つの類型の中では「学業型」が高いが、「部活動型」「アルバイト型」では低く、「消極型」「中庸型」は中間といえる。

### (3) キャンパス生活への統合—離脱

「キャンパス生活への統合—離脱」の次元を捉える質問項目としては、本調査では「昼食の場所（大学内で食事を取らない）」「大学食堂の利用頻度（ほとんど利用しない）」「大学ショッピングセンターの利用頻度（ほとんど利用しない）」「授業以外の時間の居場所（空き時間を作らない）」「メディアセンターの利用目的（利用しない）」「講義棟ロビーの改善プラン（一人でも居やすい場所にすべきである）」などがある（ここでカッコ内は、離脱を表す回答の選択肢）。これらの意見・行動により、キャンパス内の施設・設備を利用しない傾向や、友人との時間の共有を避けようとする傾向があるかを捉えることができる。図7はこれらの回答を選択した場合を各1点として、6つの質問項目の合計点（0～6点）をライフスタイル類型別に算出した結果である。キャンパス内の施設・設備の利用や友人との接触機会は、卒業要件単位の履修が進み授業が少なくなる上級学年では低いことが予想されたため、学年別に示した。

図7では合計点が高いほど学校生活における離脱度が大きいといえるが、1～3年生においては「部活動型」と「中庸型」で離脱度が小さい。しかし、4年生では「部活動型」は相変わらずキャンパス生活に統合されているが、サークル活動から引退した「中庸型」を始めとする他の4類型では、学校生活から離れていく。特に

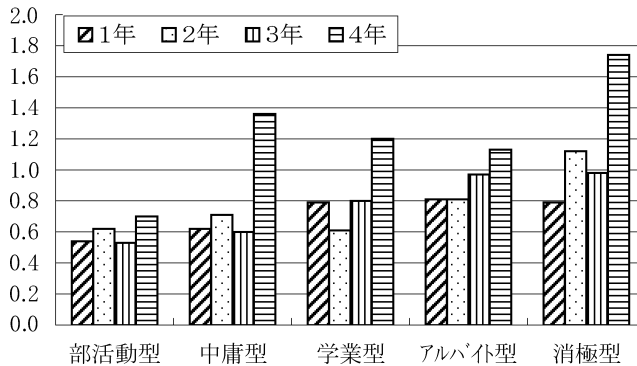


図7 キャンパス生活への離脱度の大きさ  
—ライフスタイル別・学年別—

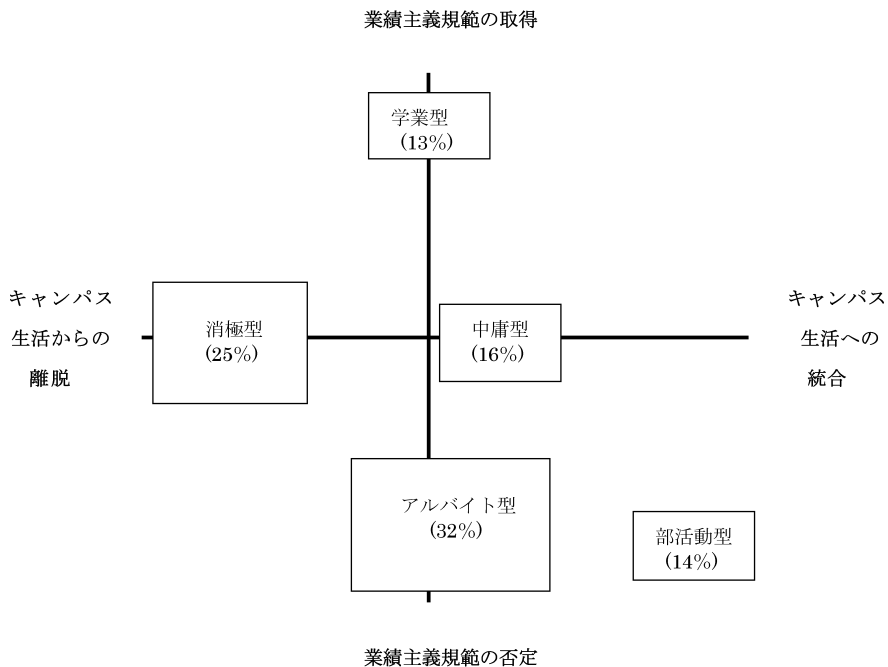
「消極型」では卒業要件単位をほぼ取得し終えると、大学キャンパスは生活の場とは遠い場所になっていくことが窺える。

このようにキャンパス生活への統合度は5つの類型の中では、「部活動型」が最も高く、「中庸型」がこれに次いでいる。「消極型」は最も低く、「アルバイト型」「学業型」は中間といえる。

#### (4) 各類型の大学への適応状況

以上の2つの次元によって、類型別の適応状況を相対的位置関係として捉えると、図8のように表される。すなわち、「学業型」は業績主義規範を取得しているものの、キャンパス生活への統合度は中程度である。これに対して「部活動型」は、キャンパス生活には極めてよく統合されているものの、業績主義規範には拒否的である。

「学業型」と「部活動型」が最も遠い関係にある対極的な類型であるのに対して、「中庸型」はその命名通りに、業績主義規範の受容もキャンパス生活への統合も中程度に位置づけられる。しかし、図2に示されるように、「中庸型」の一部は2～3年生になると、「アルバイト型」や「消極型」へと転化すると考えられる。また、



\* 図中 ( ) の数値は、全学生中に占める構成比 (%)

図8 ライフスタイル類型別の大学への適応状況

図7に示されるように、4年生になると「中庸型」そのものが変容し、キャンパスから離脱していくのである。

本学における代表的類型で、合わせて全学生の6割近くにのぼる「消極型」と「アルバイト型」は、不適応類型といえる。「消極型」では、業績主義規範は中程度に取得されているものの、キャンパス生活での統合度が極めて低い。「アルバイト型」は、キャンパス生活への統合度は中程度であるが、業績主義規範に非常に拒否的である。多数を占めるこれらの代表的なライフスタイルが不適応類型であることは、大学として大きな問題である。

## V ライフスタイル別の大学への適応方法

第IV章では、業績主義規範を取得し、かつキャンパス生活に統合されているバランスの取れた適応類型は、本調査では存在しないことが示された。そこでこの章では、ライフスタイル類型ごとに問題を検討し、いかにしてより適応的な状態に近づけることができるかを考察することにした。

### 1. 学業型

「学業型」はキャンパス生活への統合度が中程度である。本調査の結果からは、「部活動型」と「中庸型」が小集団を形成し群れて行動する傾向があるのに対して、この類型は学内では単独か、せいぜい2～3人程度の少人数で行動している状況が窺われる。単独または少人数で行動することは、必ずしも不適応と表現するには当たらない。しかし、これが「学業型」の弱みにつながる可能性があることを、指摘しておきたい。

他の多くの大学でも同様の事情と考えられるが、本学の成績上位者は学内では優秀と評価されても、学外で評価されるとは限らない。かえって成績が上の下程度の方が、就職活動において良い結果が得られる場合が多々みられる。つまり、授業をきちんと受講して教員から「A評価」を与えられる程度には優秀であるものの、それ以上の主体的な勉強や創造的な取り組みに欠ける点がある。

自主的な勉強や創造的な取り組みは、「教員—学生」という垂直的關係だけでは不十分である。むしろ、「学生—学生」という水平的關係において育まれる。具体的にはこのような水平的關係は、演習科目や文化系サークルでの活動などによって実現される。



例えば筆者の所属する経済学部では、2003年度から毎年12月の「学部デー」の行事に、3年次演習の履修者による「ゼミ発表会」を実施している。この発表会は経済学部設置されている6つのコースを分科会の単位として、コースに所属する演習グループが日頃の研究成果を報告するものである。発表会は3年生だけでなく、2年生も聴衆として参加する。このような発表の機会を作ることにより、演習での主体的な取り組みが以前よりも増したように思われる。

他に「教員—学生」関係においても、授業以外の場では従来の枠を超えた関係を築くことができ、学生は主体性を発揮できる。例えば教員の研究グループや教員が主宰する研究会などの小集団への参加機会が与えられることで、学生は切磋琢磨される。

すでに業績主義規範を取得している「学業型」においては、このような方法によってキャンパス内での統合度を高めることができるであろう。

## 2. 部活動型

「部活動型」ではキャンパス生活への統合度は高いが、業績主義規範が否定されている点が問題となる。しかし、大学から離脱している類型とは異なりキャンパス内での滞在時間が長いと、改善の方策を検討することはそれほど難しくはないといえよう。目標となるのは、文武両道型の学生モデルである。

「部活動型」は授業終了後に課外活動に取り組む時間が長く、生活時間が他の学生とは顕著に異なっている。ほとんどの学生が下校してしまう午後6時過ぎにも、半数以上の学生がキャンパス内に残っている。したがって、学内に滞在している時間をどのように有効に利用するかが、このタイプの改善のための最大のポイントとなる。

そのためにはまず、午前中の登校時間が遅い点を改めること、2つめには、授業の空き時間を活用し予習・復習などを行うことである。「部活動型」では空き時間に、「クラブハウス棟または運動施設」や「学生会館」に居ることが他の類型より多いことが、本調査では示された。そこで、「メディアセンター」を利用するなど生活空間を意識的に変えていくことが、行動パターンを変えることにつながると考えられる。

また、キャンパス生活での拘束時間が長い「部活動型」では、長時間のアルバイトは不可能である。部活動に関わる費用負担を奨学金や活動奨励金などの形で軽減することが、大学として必要である。

### 3. 中庸型

「中庸型」は業績主義規範の受容もキャンパス生活への統合も中程度であるものの、学年の進行とともに「アルバイト型」や「消極型」に移行しやすく、また、「中庸型」自体もキャンパス生活からの離脱が進行していく。

その原因は、まさにサークル集団の機能によって必然的に生じてくる。住田正樹は子どもの仲間集団を「活動集団」と「交友集団」に分類しているが、本学における体育公認団体などが活動自体を目的として形成される「活動集団」であるとするれば、多くのサークルは集団成員が活動を通して交流することを目的とする「交友集団」である<sup>16)</sup>。そのため、個々のサークルは集団としての機能的必要性が低く、交流を目的とする他の集団に代替されやすい。その結果、安定性・継続性が弱く変容が起りがちである。

したがって、「部活動型」の場合には、活動自体を直接的に支援することが有効であるのに対して、「中庸型」の場合には、大学生活の後半でサークル集団に変わる新たな準拠集団を得られるよう支援する方策が必要となる。この準拠集団は業績主義規範がすでに取得されている「学業型」では、先に述べたような方法で、比較的容易に見出すことができよう。しかし、「中庸型」では異なる方法を検討する必要がある。学年の進行とともにキャンパス内での統合度が低くなるという傾向は、「消極型」にも共通する問題であるため、次にあわせて考察することにしたい。

### 4. 消極型

「消極型」は業績主義規範を中程度に取得しているが、キャンパス生活での統合度が極めて低い。キャンパス内での統合度を高めるための方法としては、演習やサークルなどの小集団への参加以外に、ボランティア活動などがあげられるであろう。例えば本学では、学生課の登録ボランティア制度を利用することが可能性である。この制度により活動紹介を受ける方法では、授業での科目履修と異なり年度始めでなくても活動を開始でき、また、自分の時間的余裕に合わせて活動内容や頻度が決められる。また、毎月開催されるボランティア説明会・交流会や、学生課「ボランティア情報室」の学生スタッフによる活動相談・初回活動への同行など、支援体制が整備されている。ボランティアをすることにより、社会的有用感が得られるなどのメリットもある。

本学におけるボランティア活動層は実際には「学業型」に最も多いが<sup>17)</sup>、サークル離れなどによりキャンパス内での準拠集団をもたない「中庸型」や「消極型」の

学生への潜在的需要もあるであろう。実際、学生課の登録ボランティアの2005年度の学年別内訳は、1年生16名、2年生24名、3年生34名、4年生13名となっている。サークルが学年の進行とともに加入率が低下していくのとは異なる傾向が、現れている。

ただし注意すべき点は、ボランティアの受け入れ団体・施設は、学生の「自分探し」のための機関ではないということである。最近、教育の場では「地域の教育力」の活用ということがしばしば言われる。確かに、活動を通して得られる経験は学生にとって貴重であるが、受け入れ団体・施設には本来の目的がある。大学としてはこの点への配慮が必要であり、十分な事前指導をした上で学生の送り出しをしなくてはならない。

## 5. アルバイト型

「アルバイト型」は業績主義規範に極めて拒否的である。先に図6で示したように登校時間が遅く、午前中の授業での欠席率が高いことが示唆されている。また、メディアセンターでの「図書」の利用率も5つの類型中で最低である。しかしながら、「アルバイト型」の大学への適応のための方策を検討する前に、もう少し詳細に「アルバイト型」の意味するものを明らかにする必要がある。週16時間を超えるアルバイトをしている学生には、どのような特徴がみられるのであろうか。

図9は通学形態別に、ライフスタイルの5種類の構成比を示したものである。これによると、自宅通学者と自宅外通学者では差がみられる。「アルバイト型」は、自宅外通学者中では23%であるが、自宅通学者中では38%を占めている。全体の傾向として、自宅外通学者では「学業型」「部活動型」「中庸型」など大学にコミット

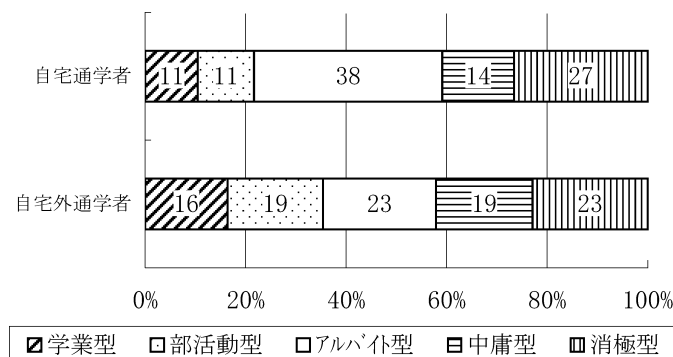


図9 ライフスタイルの5類型—通学形態による違い—

した類型が多い。これに対して、自宅通学者では「アルバイト型」「消極型」などの不適応類型が多い。

アルバイトは親からの仕送りが不足している自宅外通学者が、生活費を補う目的ですというイメージが強い。しかし、本学では第1回調査から、自宅通学者の方が「アルバイト型」が多いという傾向が、一貫して示されてきたのである<sup>18)</sup>。本調査で自家用車通学をしている学生は全体では12%であったが、「アルバイト型」の自宅通学者では18%に上っている。つまり、「住」と「食」がとりあえず保障されている自宅通学者が、ワンランク上の生活をしたという動機によりアルバイトをしている場合が多いと考えられる。一方、自宅外通学者に対しては、さらに家賃や月額食費などの質問がなされているが、「アルバイト型」は概して平均的な経済的状況であった。

個々の事例としては、確かに「アルバイト型」には苦学生も存在する。しかし、本調査のような統計的アプローチからは、長時間のアルバイトが経済的必要性から生じていることを実証する結果は、得られていない。むしろ、「アルバイト型」が3～4年生で増加していくことから、大学の上級学年ほど時間的ゆとりのあるカリキュラム体系になっていることの影響が大きい、と解釈できる。また、試験入試よりも推薦入試方式による入学者が増加している中で、高校時代から小遣い稼ぎのためにアルバイトを経験している者も増加していると考えられる。

学生のアルバイトについては今後さらに、詳細な実態調査が必要である。その結果、経済的問題の影響が大きいとすれば、奨学金制度の検討やキャンパス内でアルバイト雇用を創り出すなどの方策が考えられよう。しかし、経済的な必要性によるのではないとすれば、アルバイトについての指導や、自宅で取り組む課題が少ない授業や上級学年ほどゆとりのあるカリキュラムの見直しなどが必要である。

## VI おわりに

本稿ではまず、学生のライフスタイルを5類型に分けて、キャンパス内での施設・設備の利用状況を捉えた。その結果、ライフスタイル類型によって大学食堂の利用頻度には違いが示された。また、学生会館は登下校時にほとんどの学生が通過する正門前に位置しているにもかかわらず、居場所としての利用には差がみられた。これらの例に見られるようなライフスタイルによるキャンパス内での棲み分け現象は、施設・設備の改善は学生の行動パターンを考慮した上で進められなくてはなら

ないことを、示唆している。

次に、学生の行動や行動空間からライフスタイル類型別に大学への適応状況を検討し、問題点を指摘するとともに処方箋を示した。ユニバーサル化した大学においては、学生の格差・多様性はますます拡大していく。学生を一律に論じることはできず、類型別に対応を考えていくことが必要である。しかしながら、5つのタイプのうち「アルバイト型」については、具体的な提案を示すには至らなかった。大学では学業に関して積極的な指導を行っており、また、課外活動への支援も行っている。しかし、学生生活に多大な影響を及ぼしているアルバイトについては、大学はこれまで全く関与してこなかったのである。

アルバイトの肯定派には、社会勉強だという意見がある。しかし、職業教育としては最近ではカリキュラムとして「インターンシップ」があり、対人交渉能力の訓練の方法では地域貢献活動・ボランティアなどの機会も提供されている。このような環境の中で、アルバイトの社会勉強としての意義は以前よりも低下しているといえよう。本調査では、「アルバイト型」は喫煙率が高いなど、逸脱型文化を摂取している者が多いなどのマイナス面も示された。本学でこの10年間で最大に達した「アルバイト型」は、今後さらに増加していく可能性も考えられる。フリーターなども増加する中で学生生活でのアルバイトをどのように位置づけるのか、大学として積極的な議論が必要であろう。

## 註

- 1) 労働経済学においては1990年代以降の雇用調整は、40才台後半～50才台の大卒ホワイトカラーよりも新規学卒者によって行われている、という見方が有力である。玄田有史『仕事のなかの曖昧な不安—揺れる若者の現在—』中央公論社、2001年刊を参照。
- 2) 通信機器の発達による若者のコミュニケーション手段や行動様式の変化については、藤本憲一『ポケベル少女革命—メディア・フォークロア序説—』星雲社、1996年刊；富田英典他編『ポケベル・ケータイ主義』ジャストシステム、1997年刊、等を参照。
- 3) 佐々木正道編著『大学生とボランティアに関する実証的研究』ミネルヴァ書房、2003年刊；文部科学省ホームページ、中央教育審議会答申『青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について』2002 ([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku001/020702a/htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku001/020702a/htm), 2004年9月10日参照。)
- 4) 駿大生調査の結果は、渡辺裕子「消費社会と大学生のライフスタイル」(『駿河台大学論叢』第14号、1997年6月刊)、85-108頁；渡辺裕子「移動体通信機器の普及と大学

- 生のライフスタイル」(『駿河台大学論叢』第16号, 1998年6月刊), 131-154頁; 渡辺裕子「大学生における現代的恋愛の諸相」(『駿河台大学論叢』第20号, 2000年9月刊), 155-179頁; 渡辺裕子「大学生におけるフリーター志向とその形成メカニズム」(『駿河台大学論叢』第24号, 2002年7月刊), 83-104頁; 渡辺裕子「駿河台大学におけるボランティア活動—学生のライフスタイル, 及び学内支援体制との関連において—」(『駿河台大学論叢』第29号, 2005年1月刊), 113-137頁, にまとめられている。
- 5) 溝上慎一『現代大学生論—ユニバーシティ・ブルーの風に揺れる—』日本放送協会出版, 2004年刊, 132-134頁。
  - 6) 調査の単純集計結果は, 南林さえ子「大学キャンパスにおける施設・設備の利用意向と利用実態」(『駿河台大学NEWS』第106号, 2006年1月13日刊), 3頁, にて一部公表されている。
  - 7) 心理学における「発達」概念と社会学における「社会化」概念では, 同じ人間形成の過程に注目しつつも, 個人差に対する捉え方に違いがある。この点についての考察は, 渡辺裕子「社会化メカニズムの分析枠組—準拠集団理論と同一視理論—」(『駒沢社会学研究』第21号, 1989年3月刊), 127-151頁, で行っている。
  - 8) E.H.エリクソン(岩瀬庸理訳)『アイデンティティ—青年と危機—』金沢文庫, 1982年刊, 330頁。
  - 9) 岩佐淳一「社会学的青年論の視覚—1970年代前半期における青年論の射程—」(小谷敏編『青年論を読む』世界思想社, 1993年刊), 6-28頁。
  - 10) 井上俊「青年の文化と生活意識」(『社会学評論』第22巻第2号, 1971年刊), 31-47頁。
  - 11) 東京都青少年・治安対策本部ホームページ, 「東京都青少年基本調査(大都市青少年の生活・価値観に関する調査)」(<http://www.seisyounen-chian.metro.tokyo.jp/index9files/inv1.htm>, 2006年2月6日参照。)
  - 12) 武内清「生徒文化の社会学」(木原孝博・武藤孝典・熊谷一乗・藤田英典編『学校文化の社会学』, 福村出版, 1993年刊) 107-122頁。
  - 13) 宮台真司「新人類とオタクの世紀末を解く」(『中央公論』第105巻10号, 1990年10月刊), 182-202頁。
  - 14) 本学では課外活動を目的とする学生団体は, 活動年数や実績により, 「体育公認団体」「体育部会」「文化部会」「届け出団体」に分類されている。
  - 15) ただし, これらのうち勉強時間に関しては, 他大学での傾向とは若干, 異なるようである。最近の学生実態調査では, 「勉強志向の増加」を報告する結果が多い。例えば, 溝上, 前掲書, 12-19頁; 細川正義「充実したキャンパスライフ—課外活動の役割と期

待一」(文部科学省高等教育局学生課編『大学と学生』第439号, 2001年7月刊), 14-20頁, 等を参照。

16) 住田正樹『子どもの仲間集団の研究』1995年刊, 20-23頁

17) 渡辺, 2005年1月刊, 前掲論文, 122-123頁。

18) 自宅生のアルバイト時間が自宅外生よりも長いことを示唆するデータは, 他の調査でも見出されている。例えば, 文部科学省で2002年に, 全国2,981,056人中53,262人を抽出して実施した「学生生活調査」によれば, 私立大学の「自宅」学生ではアルバイト収入が421,900円, 「下宿・間借り・その他」学生では323,900円であった。文部科学省高等教育局学生課「平成14年度学生生活調査結果の概要」(文部科学省高等教育局学生課編『大学と学生』第474号, 2004年3月刊), 36-37頁, を参照。